

令和元年6月12日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16586

研究課題名(和文)紛争後のアフリカ社会における内生的な社会統合に関する研究

研究課題名(英文)A Study on Bottom-up Social Integration in African Post Conflict Societies

研究代表者

村尾 るみこ(MURAO, Rumiko)

立教大学・21世紀社会デザイン研究科・助教

研究者番号：10467425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ミクロな地域研究の視座からアフリカで最も紛争が長期化したアンゴラ農村社会に焦点を当て、地域住民が歴史的に構築してきた社会経済的諸活動を明らかにした。これによって、紛争後のアフリカ農村社会で内生する社会統合の様態をより具体的かつ多角的に考察した。アンゴラの農村社会は紛争後16年が経過してもなお帰還民らが社会関係を構築しがたい状況にあった。その原因として紛争中に多くの農村が長期にわたり縮小や消滅を経験したことが指摘された。ここでの生計活動は、人道支援を活用して脆弱な社会関係を補完することが特徴であった。以上について国内外の学会、論文や書籍としてまとめ成果公開をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アフリカで最も紛争が長期化したアンゴラ農村での流動性と生計活動に関する特徴を明らかとした本研究は、今日もなお紛争が絶えないアフリカ社会に関するミクロレベルでの研究に対し新たな知見をもたらす学術的意義が高い。また、難民出身国と受け入れ国双方の状況を比較し、人道支援を活用した長期的な生計変化と社会的紐帯との関連性の深さを提示した点で、世界的に注目される長期化難民への人道支援の波及効果を前向きに評価できることは社会的意義の高いものである。

研究成果の概要(英文)：Prolonged colonialization and conflicts have left significant marks on contemporary rural Southern Africa and have affected mobility in particular. Rural communities have been recurrently disrupted and reconstructed by these encounters and movements and by external and national development projects, endeavours of government and international agencies, and through local dynamics. Because local communities have different types of lives, marked by multiple and highly shifting strategies, it is not possible to describe categorically a single shared experience of colonialization or of war in the Southern African region, nor can one say that developmental projects affect the rural population equally. This study focused on not only the features of a variety of mobilities in rural contexts, but also on the practices and strategies adopted by the local populations to reconstruct their relationships locally, with the state and with the global sectors after conflict.

研究分野：地域研究

キーワード：アンゴラ ザンビア 紛争後社会 社会統合

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アフリカ紛争後社会における帰還民の社会への再統合は、平和構築や国家形成、民主化の問題と関わる重要な課題であるが、成功しているとは言い難い。この課題に関する先行研究では、外部社会によるトップダウンの政治経済介入によって紛争後の社会統合を目指す国際レジームを反映し、アフリカ社会で紛争後も依然混乱が継続する原因解明や現状解題がなされてきた(水田 2012、武内 2009)。これら先行研究では、政治学、国際関係学、開発学等の分野から紛争後の社会統合プロセスに焦点があてられており、現地のローカルな社会文化を考慮するミクロレベルの学際的研究の蓄積が薄い。また 1990 年代以降紛争が多発した国単位の事例研究が多く、アフリカ社会が国境横断的な社会経済的紐帯をローカルレベルで歴史的に再編してきた実情を十分に考慮していない。

2. 研究の目的

本研究は、アフリカで最も紛争が長期化したアンゴラと隣国ザンビアの国境一帯に住む焼畑農耕民(以下アンゴラ移住民)を対象として、ミクロな地域研究の視座から外部介入に頼らない社会関係の再構築と生計活動の再編をローカルで内生的な社会統合プロセスとして明らかにするものである。つまり本研究は、従来の国際的レジームに沿った紛争後の社会統合のプロセスに関する研究に対して、必ずしもトップダウンの社会統合策には対抗しえない、紛争後のアフリカ地域社会で内生するミクロな社会統合プロセスの動態を提示する実証的研究として位置づけられる。

3. 研究の方法

本研究は、アフリカの紛争後社会におけるミクロレベルでの社会統合の動態を国や地域を越えた社会関係と生計活動との関連をフィールドワークで得られる情報資料をもとに歴史的観点から検討した。そしてその結果を踏まえ、マクロな視点からだけでは解明しえない新たな紛争後のアフリカにおける社会統合のあり方を提示することを試みた。そのため、これまで調査をすすめてきた南部アフリカのザンビアとアンゴラ国境地帯を対象に、(1)国内外の関連施設で各種資料を収集し、植民地期以降今日までの政治経済動向や住民の社会関係・生計活動に関わる資料を分析、(2)ザンビア・アンゴラにてフィールドワークをおこない、アンゴラ移住民の社会関係や生計活動の変化を調査、(3)研究会や情報交換会を実施し、他地域の事例と本研究で得られた知見とを比較し、本研究の事例を相対化、(4)学会・論文執筆等による成果公開、をおこなった。

4. 研究成果

アンゴラの農村社会は、ザンビアに比べて移動性が非常に高いことが明らかになった。これについてさらに分析をすすめたところ、その原因の一つが紛争中に多くの農村が長期にわたり縮小や消滅を経験しており、紛争後に帰還した帰還民らが紛争後 16 年が経過してもなお農村における社会関係を構築しがたい状況にあることがわかった。

紛争後アンゴラ東部に住むンブダの人びとがとげた社会文化の変化を分析したところ、アンゴラ東部にザンビアから帰還したンブダは、日常生活のなかで困難をかかえていた。彼らの脆弱な社会経済基盤を支えているのは、緊急人道支援で配布された改良作物であり、それには避難生活で慣れ親しんだ味や調理法が関係していることが明らかとなった。

また、南部アフリカのアンゴラと国境を接するザンビアには、19 世紀以降、アンゴラからの民族集団が移動を繰り返してきた。20 世紀中葉から始まったアンゴラでの紛争で発生した難民に注目しながら、これまで明らかにされてこなかった紛争前後の南部アフリカ農村の現代史を国内外の資料とともに分析したところ、流動的な生活を余儀なくされるなかで、移動先社会での政治経済的ニッチを獲得してくる人びとの営みが明らかとなった。

この現状の比較分析のために必要な補足的情報資料について、国内外の関連機関で補足的な資料を収集するとともに、関連する研究者や NGO 関係者、政府関係者らとともにアフリカ紛争後社会の統合に関する情報交換をおこなった。その成果は、その場で共有し現地へ還元するとともに、国内外での学会発表を通じて、研究成果の公開をおこなった。

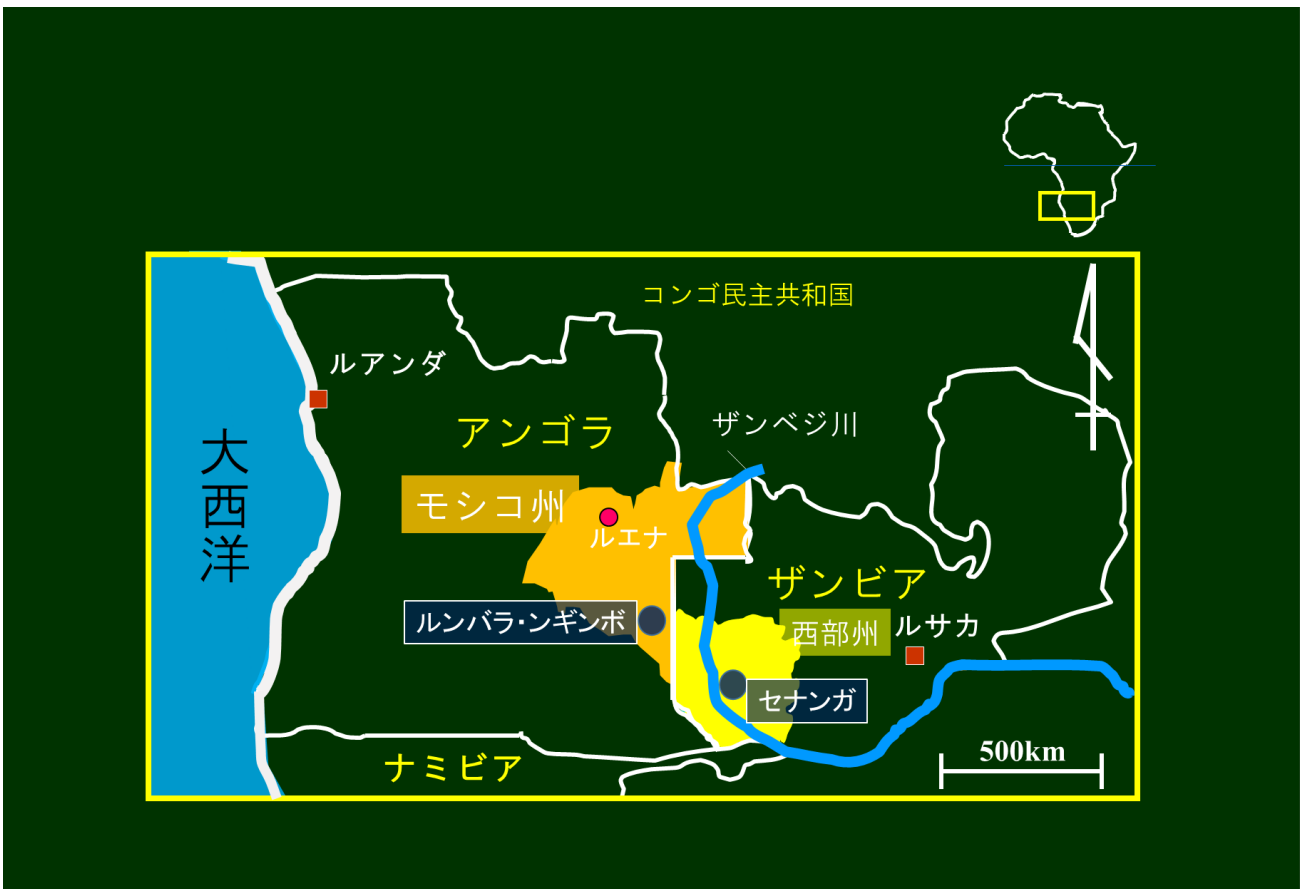


図1 調査地の位置

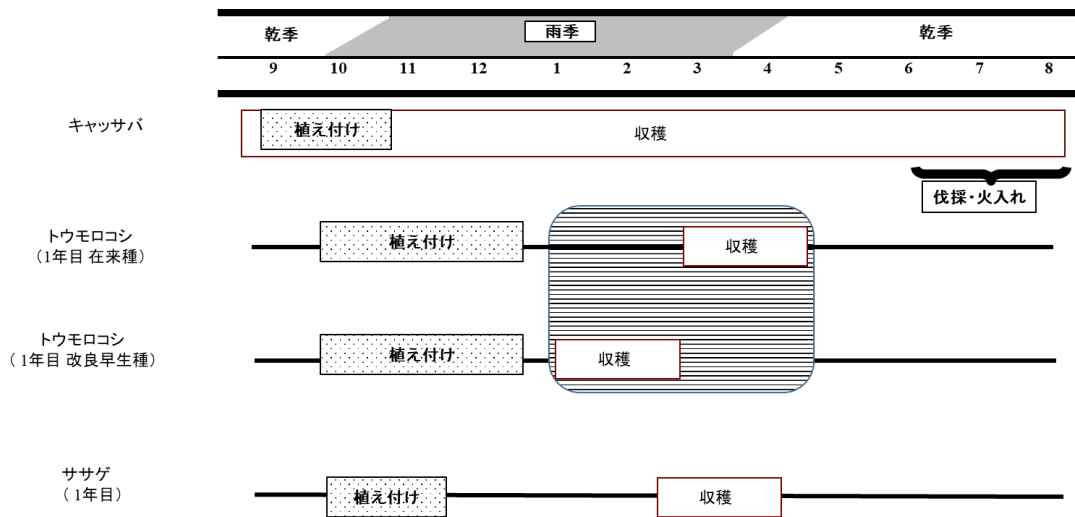


図2 焼畑での作付体系

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

MURAO, Rumiko, 2017, "The Daily Life Strategies of Small-scale Farmers after Prolonged War: Long-Term Influence of Humanitarian Assistance", African study monographs Supplementary issue53. 103-116. Konaka, M. and X. Sun (eds), Center for

村尾るみこ、2016、「ザンビアにおける元難民の社会統合の現状」21世紀社会デザイン研究、査読無、15. pp. 79-86.

〔学会発表〕(計 5件)

MURAO, Rumiko, 2018, “The Daily Life Strategies of Small-Scale Farmers under Post-conflict Situation” ASAI University of Bologna.

村尾るみこ、2018、「帰還と庇護国での定住の境界」、日本アフリカ学会(於北海道大学)

MURAO, Rumiko, 2017, “The Daily Life Strategies of Small-Scale Farmers under Post-conflict Situation” Congresso Internacional Angola: os legados do passado, os desafios do presente (University of Lisbon)

MURAO, Rumiko, 2016, “Local Struggle with the Cassava Cultivation in Southern Africa: “Revolution” for the Immigrants’ Life”, International Rural Sociology Association conference, Sustainable and Just Rural Transitions: Connections and Complexities “ Session 45B Green Revolution from Comparative Perspective: Between Asian and African Experiences 2, (Ryerson University)

村尾るみこ、2016、「アフリカ南部農村における緊急人道支援の影響」、日本アフリカ学会(於日本大学生物資源科学部)

〔図書〕(計 3件)

村尾るみこ、2017、「第2章アフリカの難民問題を再検討するー難民が故地での生活をはじめれば問題はなくなるか?」、椎野若菜、白石壮一郎編、『社会問題に出会う』、217(29-44)古今書院

村尾るみこ、2017、「ザンビアにおける難民の社会統合」、宇佐見耕一、小谷眞男、後藤玲子、原島博、滝澤三郎、岡進一他編、『世界の社会福祉年鑑2016』、440(121-144)旬報社

村尾るみこ、2016、「第11章限界を生きる焼畑農耕民の近現代史 ザンビア西部のキャッサバ栽培技術を中心に」、石川博樹、小松かおり、藤本武(編)、『食と農のアフリカ史』、384(273~288)昭和堂

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。